

## 「私の論文作法」

### “風が吹いたら桶屋が儲かる”にみる論文の書き方

藤本 耕士（拓殖大学名誉教授）

#### 序

筆者が初めて本格的論文を書いたのは、英国ヨーク大学大学院に留学した折に仕上げた学位論文（Master of Philosophy in Public Finance）である。卒業後は途上国の開発コンサルティング関係の社団法人で研究調査に従事し、その後海外経済協力基金（1961年に誕生の途上国向け円借款を扱う日本の援助機関、2008年に旧JICAと統合し新しいJICAとして再誕）で日本政府の国際援助活動に従事したこともあって、本格的な論文を書く機会にはあまり恵まれなかった。

2004年に拓殖大学で教鞭をとるようになってから、筆者は論文作成および学生の論文指導に正面から取り組むこととなった。この間に発表した本格的論文数はそれほど多くはなく20件を超えないと思う。しかしながら論文指導は修士・博士を合わせて40件以上になる。このような経験を通して論文の書き方に関する多くの教訓を学ぶことが出来た。本論ではそれらのうち重要と思われるものについて、焦点を当てて取り纏めてみたい。

拓殖大学で論文指導を始めてから数年の間、大学院生に対し論文の書き方を具体的かつ簡潔に説明する方法はないかと思慮し続けた。そんな中、ある日突然に頭をかすめたのが標題にあることわざ“風が吹いたら...”である。すなわち、この諺が、論文の書き方の要諦を端的に物語っているということに気づいたのである。

#### 1. “風が吹いたら桶屋が儲かる”という諺が教える論文の構成

この諺は、「ある国のある地域では、よく強い風が吹きほこりが舞い上がる。ほこりが舞うと多くの人の目に入る。そのうち一定の割合の人は目の病を発症し、治癒しない場合には盲人となる。盲人の職業は限られており、ほとんどの人は按摩になる。按摩は三味線を弾きながら路地を流して歩き客を取る。よって、三味線の需要が増える。三味線には猫の皮が使われるので猫の数が減る。猫が減るとネズミが増える。ネズミはお櫃に残った米粒をあさるときに米櫃をかじる。かじられた米櫃は、桶屋に持ち込まれ修理される。こうして桶屋の仕事が増え、桶屋は儲かる」という意味である。

この諺は、それ自体一つの仮説（Hypothesis）とみなすことが出来る。そして、この仮説を支える前提条件（Assumptions）には、諺の意味が示す如く、以下のようなものが考えられる。

- (i) この地は未舗装の道が多い。
- (ii) 強風がよく吹き、その都度ほこりを舞い上げる。

- (iii) ほこりの性で目の病気に罹る人が多く、盲目になる人も比較的多い。
- (iv) 盲人の職業としては按摩が一般的である。
- (v) この地域には多くの猫とネズミが住み着いている。
- (vi) 按摩は三味線を弾きながら客を見つける。
- (vii) 生活必需品として木製の米櫃や桶が使われている。
- (viii) 地域内のあちこちに桶屋（500戸当たり一軒）が職業として営業している。

この仮説を実証するためには、研究者はまず上記 8 つの前提条件（Assumptions）が満たされていることを検証しなければならない。そのうえで、文字通り仮説そのものが示す因果関係が成り立つことを証明するのである。この因果関係の証明のためには、実存のデータや情報を収集分析し、証拠として提示する必要がある。

前提条件のチェックやデータや情報収集分析等には現地調査（フィールド・ワーク）が不可欠である。このケースでは、研究者は 300 年前の江戸時代にタイムスリップし、上記前提条件を満たす地域に赴いて分析に必要な情報やデータを収集しなければならない。現地調査の手法や期間は多様である。調査手法としては、既存のデータを利用する場合やデータ収集をアンケート調査により集める場合などがある。アンケート調査をする場合には統計分析に有意な標本数を考慮して実施しなければならないし、小規模な悉皆調査を実施しなければならないかもしれない。期間的には、数年にわたって継続的に情報・データ収集することも考えられる。具体的な情報・データの種類としては、一年のうち強風の吹く日数とか、100 世帯当たりの桶屋の軒数とか、地域住民数に占める盲人の割合とか、桶屋の受注量増減とそれに伴う収入の増減とか、である。

この仮説の場合、風が吹くという原因（Cause）と桶屋が儲かるという結果（Effect）を直接結びつけることは困難である。なぜなら、この原因が結果に到達するまでには、冒頭で述べた如く、一連の事象が連鎖的に起こらなければならないからである。換言すれば、下記(i)から(ix)の事象が現実にかかることを実際のデータや情報を示すことによって証明しなければならない。

- (i) この地域では、毎年特定の季節に強風が吹く。必要なデータ・情報として強風の吹く季節と日数。
- (ii) 強風の季節には埃が舞い上がる。その結果、目の病が増え盲人も増加する。必要なデータ・情報として舞い上がるほこりの程度、目の病気にかかる人の数、盲人の増加数など。
- (iii) 盲人のほとんどは按摩という職業に就く。必要なデータや情報として盲人の中から按摩の職業に就く人の数。
- (iv) 盲人の按摩が使う三味線の需要が増え、生産及び販売数が増える。必要なデータ・情報として三味線の生産量。

- (v) 三味線に必要な猫の皮を取るため多くの猫が殺され、猫の数が減る。必要なデータや情報として猫の増減数。
- (vi) 猫が減る結果としてネズミの数が増える。必要なデータ・情報としてネズミの増加数。
- (vii) ネズミの数の増加によって台所で使用する米櫃や桶が頻繁にかじられる。必要なデータ・情報として米櫃や桶の被害数。
- (viii) かじられた米櫃や桶は都度、修理のために桶屋に持ち込まれる。必要なデータ・情報として米櫃や桶修理仕事の増加件数。
- (ix) 桶屋は桶修理の仕事が増え、結果として収入が増える。必要なデータ・情報として桶屋の収入増加額。

このような一連のプロセスを経て、この諺の因果関係、すなわち“風が吹くという原因”が“桶屋が儲かるという結果”に結びつくという関係、が証明される。すなわち、仮説としての諺が正しいことを証明されることになるのである。換言すれば、論文の完成である。

ちなみに、研究対象地域において実際のデータや情報の収集分析、観察等を通して研究することを実証研究 (Empirical Study) と呼んでいる。実証研究は、良質の論文作成には必要不可欠の要素となっている。

## 2. どのようにして仮説 (Hypothesis) を生み出すか

上でみた通り、論文を書くということは一定の条件下で仮説を立て、その因果関係をデータ分析等により証明することである。仮説は通常周到な事前の準備を経て設定される。したがって、仮説が設定されると、多くの場合論文の輪郭が明らかになることを意味している。その意味では仮説の設定が論文を決定すると言って過言ではない。それでは、仮説はどのようにして生み出されるのであろうか。そこで、ここでは筆者の経験に基づいて仮説を立てるためのヒントをいくつか紹介したい。

### 2.1. 風が吹いたら桶屋が儲かるという仮説はどのようにして生まれたか

この仮説が生まれたのは、随分と昔のことであることは自明である。そしておそらくは、日本のある地域に住む、極めて博学で知られる人物が住民の日々の暮らしを長年観察していて、一つの経済社会現象として“強い風が頻繁に吹いた年の翌々年には桶屋が大層繁盛する”という事実に気づいたのではないか。そして、この博学の人は長年の観察を基にこの仮説が成立することを、関連現象の連鎖として順を追って説明したと思われる。この人物はまず近所・近隣の人々にこの仮説とその理由を説明し、これを聞いた人々はその通りと同意し、時の経過とともに村落中、地域中、国中に広まり定着していったのである。そして、この仮説は社会全体が認める諺 (理論) になったのである。

この仮説誕生の経緯が上に説明した通りであったかどうかは定かではない。がしかし、仮

説は多くの場合、学者や研究者が蓄積した経験（研究、観察、調査経験等）や知識（理論等）の中から生まれることを示唆している。言い換えれば、仮説を生み出すためには、それを生み出すもととなる経験や知識が必要であるということである。

## 2.2. 仮説を立てるまでには周到な準備が必要である

筆者が特定のトピックについて論文を書く時には、事前にそのトピックに関連ある文献（論文、専門分野の定期刊行物、書籍等）を読み込むのを常としている。通常、この過程でトピックに関する仮説が徐々に鮮明になる、と同時に論文を作成する際に利用できる多様な調査分析方法等をも学ぶことが出来る。

仮説がはっきりしてくるまでは、長い真っ暗なトンネルの中でどっちに行けばいいのかわからずもがき苦しむような状態に陥る。仮説が徐々に鮮明になってくると、暗いトンネルの向こうから一筋の光が差し込んできた感じになる。多くの文献を読み込むという事前の準備作業を経て仮説が明確になるということは、論文の全体像がおぼろげながら見えてきたことにもなるから、その後の論文執筆は格段に楽になる。

## 2.3. 仮説として専攻分野における最先端あるいは流行の課題を取り上げるも一案

筆者は英国のヨーク大学で財政学を専攻したが、当時、財政学分野の学界では“国が法人税を引き上げると、企業は税の転嫁を図り生産物の価格を引き上げる（Tax Shifting）”という課題（仮説）が議論されていた。多くの研究者が異なった結論の論文を発表していたが、時流のテーマを研究論文の仮説にすることは良案である。ちなみに、筆者は学位論文の一部にこのテーマを取り入れている。

このような方法で仮説を立てるのはある意味安易な方法であるが、世界の学者・研究者に伍して最先端の学問的課題を研究することから得られる知識と経験は多大なものがある。他方、大学院で博士号取得を目指して研究をしている学生が論文の仮説を模索しているような場合、博学の教官が論文指導してくれていれば、最新の論文テーマを紹介してくれる幸運にめぐまれることもある。

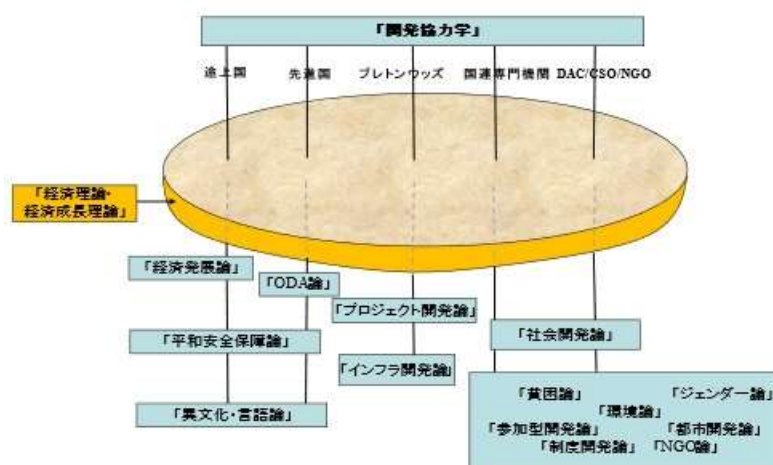
## 2.4. 仮説を立てるためには幅広い関連科目の習得が推奨される

幅広い関連科目の習得は、より広い視野から仮説の設定を可能にするのみならず、分析の切り口をより包括的にし、論文の質を向上させる。図1の開発協力学のグランド・デザインには開発協力のステークホルダー、開発協力学の背景となる経済理論および開発協力学が包含する多様な科目の三者の関係が示されている。発展途上国への開発協力は大別して5つのステークホルダー、すなわち発展途上国、先進国、ブレトンウッズ機関、国連専門機関およびDAC（開発援助委員会）／CSO（市民社会組織）／NGOによって実施される。これらのステークホルダーによって実施される開発協力方針や政策は、時流の経済理論（ケインズ経済学とか新古典派経済学）をベースに策定される。多種多様な課題に対する開発協

力の実施経験が蓄積されると、課題別に開発協力を促進するための理論化が始まる。特定の課題の理論化が始まることは大学院レベルでの科目の誕生を意味している。このようにして開発協力学に必要な科目が決定され、配置されるのである。

研究者が、図1の「プロジェクト開発論」に係る仮説を設定し論文に取り組む場合、主たるステークホルダーとしては世界銀行、理論的背景としては新古典派経済成長理論、関連科目としては「ODA論」、「経済発展論」、「インフラ論」、「環境論」、「参加型開発論」、「貧困論」などが関係してくる。この研究者は世界銀行、新古典派理論、関連科目すべてについて必要な知識を持っていることが求められる。幅広い関連科目の習得は必要不可欠なのである。

図1 開発協力のグランド・デザイン



### 3. 論文執筆及び指導を通して学んだ教訓

筆者は、研究と論文指導活動を通して論文の書き方に関する多くの教訓を学ぶことができた。上記2の仮説に係る4つのヒントもそれらの教訓の一つであるが、ここではその他の主要な教訓を以下に取り纏めることにしたい。本節で取りまとめる8つの教訓は、押しなべて多くの研究者にとって有益なものであると思われる。

#### 3.1. 理論の発展は前提条件を変化させることによって可能となる

理論は広く学者に受け入れられた経済社会現象を説明する法則である。一方、仮説は経済社会現象を説明するために提案された法則である。したがって仮説は、研究者が実際に研究することによって仮説が成り立つことを証明しなくてはならない。このように、理論はすでに証明された法則であり、仮説は証明される前の法則であるといえる。したがって、理論と仮説は両方とも前提条件のもとに成り立っている。

例えば、価格と生産物の需要量の関係をグラフに描くと右下がりになるという需要の理

論についてみてみよう。このグラフの意味は、価格が低い時には人々はより多く購入し、価格が高い時はより少なく購入することを意味している。これは道理をわきまえた人々の行動を前提としている。すなわち、需要の理論の重要な前提条件 (assumption) の一つである。もしこの前提条件が変更されると、需要曲線の形も変る可能性がある。右上がりになるかもしれない。

理論を発展させる一つの有力な方法は、前提条件 (assumption) の変更 (削除や導入) である。現実合わない前提条件を取り除き、より現実にあった前提条件を導入することによって理論は発展すると言える。例えば、投資という生産要素だけに注目した伝統的経済成長理論が、追加的に労働と技術を生産要素として取り入れた成長理論 (ロバート・ソローの成長理論) に発展したが如くである。またルイスの二部門間発展理論をラニスとフェイが発展させたラニス・フェイの発展理論も例として挙げられる。これらは、既存の理論の改善が、前提条件を減らして、或はより現実的なものに変更することによって可能になるという良い例である。

### 3.2. 博士論文は2本のペーパーである

“博士論文は通常2本の論文で成り立っている”という考え方は、筆者が英国のヨーク大学で学位論文に取り組んでいた時に学んだ考え方である。2本の論文のうち最初の1本は、理論の発展を扱った理論的論文 (博士論文ではこれが仮説として位置付けられる) である。通常この論文は既存の理論を何らかの形で発展させものでなくてはならない。この際の有効な手段の一つが上記3.1.で検討した前提条件の改善変更である。

2本目の論文は、1本目の論文で提示した改訂理論 (仮説) を実証するための論文、すなわち、収集した第一次データや第二次データ等の分析 (実証研究) に基づいた実証論文である。この実証論文により理論的論文 (仮説) が証明されると博士論文が完成するのである。

修士論文を指導していると、学生が既存の理論をそのまま利用して、過去に誰もが対象としなかった (論文のオリジナリティーの部分として) 地域やセクター、あるいは産物を対象にデータを収集分析して修士論文を仕上げるケースがある。例えば、コブダグラス生産関数 ( $Y = AK^\alpha L^{1-\alpha}$ ) を利用してインドネシアの東ジャワ州のコメの生産関数を求める論文である。東ジャワ州のコメについての分析が初めて取り扱われる場合、この点が論文のオリジナリティーである。私見であるが、筆者はこのタイプの論文であっても修士論文として認めても良いと考えている。

### 3.3. 論文は醸成される

仮説が設定され、執筆に入っても論文は短期間に完成しえないのが通例である。執筆中に多種多様な課題や問題に直面し、その都度解決しなければならないからである。文献を参照して直ちに解決できるものもあるが、多くの場合執筆者が何日あるいは何週間もかけて種々の文献を読み、そこから得たヒントをもとに独自の解決案を生み出すというプロセス

を辿るのである。このプロセスはあたかもチーズやみそのような食品が、発酵というプロセスを経て美味しさのみならず栄養価の高い食べ物に変化するのに似ている。例えば、筆者が数年間考え続けていた“論文とは何かを明快に学生に説明するという課題”の解決案が突然標題の諺に結びついたのは、まさにこの醸成プロセスを経てであった。

### 3.4. 論文を完成させるまでには、その進捗に合わせて頻繁な推敲が必要

論文は、序、第1章、第2章、第3章…、結論と順に一度書けば完成するものではない。例えば、序に続き第1章を書き終えると、また序に帰って読み直す必要がある。第2章を書き終えると再度、序に戻って最初から読み直すのである。このような推敲は、各章の中でも個別に実施する必要がある。

推敲は論文の完成度（論理の流れ、分かりやすさの向上すなわちレトリック、用語と文章の精度）を高めるために必要不可欠な作業である。推敲の過程で、場合によっては、序で述べられる仮説を部分的に変更することもあり得るのである。筆者はヨーク大学留学中に、博士論文執筆中のギリシャ人留学生が最後の実証分析を実施したところ、仮説とは逆の結論しか得られずその対応に追われていたのを思い出す。筆者はその後まもなく帰国したので、この学生がどう解決したかは定かではないが、おそらく仮説の再設定のような対応をしたのではないかと思われる。ちなみに、この学生は博士号取得後、ヨーク大学経済学部の先生として教壇に立っている。

### 3.5. 学術論文には“私（I）”を主語として使ってはならない

学術論文を書くに当たって、原則“私（I）”を主語にした文書を使ってはならない。筆者は明文化されたこのようなルールを見たことはないが、研究者の間では暗黙知として広く知られている。“私（I）”を使用してはならない理由は、論文の中で研究者である“私”が展開する議論は、例外なく過去において複数の学者や研究者がより完全な形で議論し整理し終えているからである。それでは、“私”の代わりにどんな人称代名詞を使用するかと言えば、“われわれ（We）”、“総称の人（One）”、“不特定の人（They）”などが考えられる。但し、人称代名詞を主語として選択する煩わしさを避けるために、多くの場合、モノやことを主語とする受け身の文章が用いられる。

### 3.6. 論文で使用する用語はすべて明瞭でなければならない

論文の中で使用する用語は、明確で曖昧さのない意味を持たなくてはならない。言い換えれば、用語は明確に定義されなくてはならない。用語の正確な定義と統一した使い方なくしては、論理や分析が曖昧になり、書き進むほどに論文の曖昧さが拡大していくのである。明瞭な用語の使用は論文の論理や分析の質を向上させる。

例えば、筆者は“モンゴルの経済発展のシナリオ”と題する論文を書いた折、“政策”と“戦略”という用語を使用した。参考にしたいくつもの世界銀行とアジア開発銀行の資料

にはそれぞれに政策と戦略を明確に定義することなく、時には同じ意味で時には異なった意味で使用していた。どれが政策でどれが戦略なのかを区別することが極めて困難であった。それ故、筆者は資料ごとに使われている用語の意味を峻別し、再定義しなければならなかった。世銀、アジア銀というトップの国際機関が正確に用語を定義し使用していない事実は残念なことである。

また、インドネシアのブランタス河総合開発計画プロジェクトを取り扱った論文を書いたとき、制度 (Institution) の発展とその貢献という側面にハイライトを当てたが、この制度の定義にダグラス・ノース (ノーベル賞受賞エコノミスト) の定義を適用した。すなわち、制度 (Institution) とは人間の活動に相互に影響する制約 (ルール) のことである。経済の分野で定義すると“取引費用を削減するために生み出された法律、規則、制度、手続き、システム、形式・様式、慣習など”ということになる。ブランタス・プロジェクトではその開発に係るすべての制度を抽出し、それらの役割と貢献を明らかにしたわけである。制度をこのように学術的に定義することによって、この論文はそのオリジナリティーと創造性を担保できたのである。用語が明瞭でなければならないという理由は正にここにある。

上述のごとき概念的用語の定義が“明瞭な用語”の必要条件とするならば、十分条件と呼ぶべきもう一つの重要な側面がある。それは、“すべての用語は、概念としての定義はもとより背後に具体的な現実の事象が認識されるものであるべき”ということである。例えば、筆者が指導した博士論文に開発プロジェクトのガバナンス (Governance) を扱ったものがあった。世界銀行の定義 (政府セクターの管理能力と効率、説明責任、開発のための法的枠組み、情報と透明性) を参考に理解を深めさせたが、真に理解するためには実際に開発プロジェクトの実施管理運営を経験することが必要と思われた。開発プロジェクトのガバナンスという用語の概念としての意味は何となく理解できるように思うが、具体的にはどんな例があるのかを示せる必要があるということである。世銀の定義にある政府セクターの開発プロジェクト管理能力の例としては、“政府の担当部署は援助プロジェクトの開発効果の発現状況と問題点を十分把握 (プロジェクトの事後評価報告書を独自に作成) しており、かつ問題改善のための活動に従事している”といったことである。十分条件は、通常、実際の実務経験や現場における注意深い観察によって満たすことが出来る。

### 3.7. 論文のスタイルは国際標準に従ったものでなくてはならない

論文の書き方には国際標準がある。そして、論文は例外なくこのような国際標準に依拠して書かれる。その代表的なものの一つがシカゴ大学発行のシカゴ・マニュアル (*A Manual for Writers of Research Papers, Theses, and Dissertations*) である。

筆者がヨーク大学で学位論文を仕上げたが、このような国際標準があることなど全く知らなかった。論文執筆中に大学あるいは指導教官が教えてくれることもなかった。従って、当時すでに出版されていたシカゴ・マニュアル (1955年に *A Manual for Writers of Term Papers, Theses, and Dissertations* のタイトルで初めて出版された) を参考にした記憶は全くない。図



書館に配架されている先輩の博士論文のスタイルをまねたに違いない。しかしながら、今、筆者の学位論文を読み返してみると、そのスタイルが国際標準の基本に忠実に従っていることに改めて気づかされる。

ちなみに、日本で論文の書き方に関する代表的な出版物としては、澤田昭夫著「論文の書き方」があるが、初版は1977年であるのみならずその内容は欧米で出版された国際標準に基づいている。近年では、ほとんどの日本の大学でこのような国際標準をベースに、各大学の特殊事情を加味したスタイルが利用されているようである。

### 3.8. 論文指導は教員にとっても学びの宝庫である

論文指導は担当教員にとって学びの宝庫である。教員はオリジナリティーのある知的生産物を生産するすべての過程、すなわち、仮説-仮説を支える前提条件と前提条件の確認-仮説の因果関係の実証（仮説の証明）の過程をつぶさに指導するからである。学生は常に指導教官が熟知しているテーマを選ぶわけではない。そのような場合でも、指導教官は指導の過程で学生が直面する問題や課題に対し、的確なアドバイスやコメントをしなければならぬ。すなわち、指導教員は創造的指導のための準備が必要となるのである。この準備作業が指導教員に学びの機会を与えるのである。指導方法や指導内容にもよるが、指導教員は新規に博士論文を書いたに相当する学びがあると言える。

但し、ここに述べた教訓は筆者特有のものかもしれない。実際、筆者はヨーク大学留学中に担当指導教官よりそのような指導を受けた記憶は全くない。

## 結論

この小論は、筆者の論文作成及び作成指導経験に基づいて、論文を書く際に留意すべき点を整理したものである。したがって、ここで議論された諸点は個人的なものではあるが、多くの研究者や学者から同意が得られるものと考えている。

風が吹いたら桶屋が儲かるという諺が示唆する論文作成の一連の流れと論理的構成、“仮説-仮説を支える前提条件の確認-仮説の因果関係の実証（仮説の証明）”は論文の基本的構成として堅持されなくてはならない。その中でも最初のステップである仮説の設定は最も重要である。周到な準備に基づいて仮説を設定することが出来れば、比較的円滑に論文の執筆を進めることが出来る。

上記2および3で取りまとめた仮説のためのヒントと8つの教訓は、すべて良質の論文を書くための必要条件である。良質な論文の十分条件は、言うまでもなく、論文の分析手法や内容、更には創造性のレベルということになる。

筆者がはじめて本格的学術論文を書いたのはヨーク大学での学位論文（Master of Philosophy）である。当時、この小論でとりまとめた論文の書き方の教訓については、残念ながら全く知らなかった。もし学位論文に執りかかる前に、このようなことを学んでいれば、論文作成がどれほど楽であったかわからない。かつて、ベンホーガンが1957年に出版した

「ベンホーガンの五つのレッスン」と題するゴルフ教書（ゴルフ聖書と呼ばれている）のごとくに、である。

しかしながら、論文の書き方を真に体得するためには実際に本格的な論文、例えば博士論文を書いてみなければならない。一度でも論文という知的生産物を生み出す苦しみと生み出した時の喜びを経験すれば、筆者が上に取りまとめた教訓が実際の論文執筆に生かせるようになると思われる。ベンホーガンのゴルフ教本が生かされるのは、実際の練習や試合を通してゴルフの秘訣を体得した時なのである。

(以上)